

年 次 報 告 書

2017

Annual Report 2017



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター



年 次 報 告 書
2017

Annual Report 2017



まなびのカフェ

中学生・高校生をはじめとした一般の方々に、教員・大学院生・学部生が、研究内容をわかりやすく伝え、参加者と共に語りあい、対話の場をつくります。



まなびのカフェ

人間科学セミナー

人間科学研究科教員や、大学内外の研究者によるセミナー（研究講演）を、市民にも開放することで、異分野交流を発展させると共に地域との交流を深めます。



人間科学セミナー

多様な活動 社会 貢献をめ



ランチトーク



ランチトーク

昼休みに食事をしながら気楽に行う学部生・大学院生の研究プレゼンテーションや、哲学カフェ形式でのコミュニケーションなどを通して、学生どうしの“つながり”をつくります。



「シリーズ人間科学」



「シリーズ人間科学」の出版

“食べる・老いる・助ける・感じる”などをテーマにし、“人の暮らし”を題材に、人間科学研究科の学際的な研究内容を紹介する本をシリーズで出版します。

公開講座



研究者と市民が“つどう”ことを目的とした公開講座。講演だけでなく、教員・スタッフ・学生と市民が共に語り合う場をつくり、実践的な“つながり”をめざします。



公開講座



出張授業

出張授業

高等学校だけでなく小・中学校でも、自身の研究テーマをわかりやすく発表したり、語ったりする出張授業を、教員・学部生・大学院生の協働により実施します。



をとおして
への
ざします



コンポジウム



「私の一冊」



コンポジウム

コンサートとシンポジウムを融合させたコンポジウム。教員を中心に、学部生・大学院生も参加し、音楽と講演を通して研究者と市民の学び合いの場をつくります。

「私の一冊」の発行

学部1年生に読んでほしい本を、教員がひとり1冊ずつ紹介し、冊子にまとめました。教員と学部生が共感し話題が生まれる“きっかけ”をつくります。



目 次

はじめに	1
I. 組織の概要	2
1. 未来共創センター設立の経緯と背景	2
2. 活動目的と概要	3
3. 運営体制	5
II. 活動報告	6
1. 人間科学セミナー	9
2. ランチトーク	17
3. 冊子『私の一冊』の作成と配付	25
4. 高大連携	26
5. 公開講座	27
6. まなびのカフェ	29
7. コンポジウム	39
8. 「シリーズ人間科学」の刊行	41
9. 未来共創センターホームページ	42
10. 大阪大学オムニサイト	43
11. 障害・難病を抱える学生の就労支援ネットワークの形成	47
12. 学生の活動と単位化	49
13. 活動した学生たちの声	50

はじめに

未来共創センターの2年目が終わりました。1年目に引き続き、2年目の活動を冊子としてまとめ、報告いたします。

人間科学部・研究科の「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。当センターの2年目の活動も、1年目と同様に、手探りではありましたが、順調に展開することができたと思います。その内容を、この報告書でご確認いただければ幸いです。

当センターの活動の趣旨を御理解いただき、ご支援をいただいた多くの方々に御礼を申し上げますとともに、次年度以降の継続したご支援をお願いする次第です。さらに、本報告書をご覧になった皆様方が、私たちセンターの活動に加わっていただければ、これほどうれしいことはございません。何卒よろしくお願いします。

当センターの2年目である2017年度においては、『シリーズ人間科学』第1巻『食べる』を大阪大学出版会から刊行することができました。「人間科学とは何ですか」という問いは、1972年に大阪大学に日本で初めての学部として「人間科学部」が創設されて以来、ずっと問われ続けてきたものです。人間科学部創設50周年を4年後に迎えますが、今後も続くに違いないこの疑問に対する現時点での答えを示すために、このシリーズを刊行することにしました。そして、その第1巻として『食べる』を刊行しました。人間科学研究科教員あるいは、人間科学と関わる研究者が集い、第1巻では「食べる」をキーワードに、執筆陣が独自の視点で語り合い、発信しました。本シリーズは、高校生、大学初年次生から一般の方々までを視野に入れて、読みやすい本であることも目指しています。第2巻以降も、『老いる』、『助ける』、『感じる』などのタイトルで順次刊行する予定です。ご期待ください。

当センターの設立から2年間が終わり、私のセンター長としての任も終了しました。新しいセンター長に志水宏吉教授・人間科学研究科副研究科長が付かれ、当センターの今後の活動はさらに加速します。これからも、多くの方々がセンターの活動に興味を持っていただき、そして加わっていただき、当センターが創造的で、且つ実践的な活動拠点に育っていくことを願っています。

2018年3月31日

未来共創センター長 中道 正之

I. 組織の概要

1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そのために、新しい枠組みが必要であると、私たちは結論しました。

そこで、本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻（行動学系、社会学系、人間学系、教育学系の4学系）とグローバル人間学専攻（グローバル人間学系の1学系）の2専攻を、人間科学専攻（行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系）の1専攻にしました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」の開拓を目指して、従来の5学系の教員が参集して「共生学系」を創設します。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、今回の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」を新たに設置しました。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

2 活動目的と概要

【活動目的】

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、本センターの多様な活動を、高校生や地域住民の方々に対しても発信し、高大連携と社学連携の発展に貢献します。

【活動概要】

1. 人間科学セミナー：人間科学研究科教員を中心に、大学内外の研究者による研究講演を、市民にも開放して実施する。
2. 公開講座の企画、運営：人間科学研究科教員を中心に、学内外の研究者と市民を結ぶ場を創る公開講座を1回実施する。なお、教員からの一方的な講演だけでなく、講演終了後に、講演した教員、スタッフ、学生、市民らとの歓談の場を設け、実践的な交流を目指す。
3. まなびのカフェの企画、運営：人間科学研究科教員と大学院生・学部生が協働し、箕面市国際交流協会や應典院とも連携をとり、中・高校生と保護者に研究をわかりやすく語り、対話する場をつくる。
4. 小・中・高大連携の活動：人間科学研究科教員、大学院生、学部生との協働で、小・中・高校生に自身の研究をわかりやすく伝える。
5. 大学院生と学部生によるランチトーク：まなびのカフェの研究科内版。昼休みに、食事をしながら、大学院生と学部生が研究内容を語る。専門分野内の会話ではなく、専門外の人に語り、質問することを、気楽に楽しむ場。
6. コンポジウム：「コンサート」と「シンポジウム」を合わせた造語。人間科学研究科教員を中心に、学部・大学院生も補助的に加わり、音楽と講演を通して、研究者と市民の学び合いの場を提供する。

7. 『私の一冊』：人間科学研究科教員が学部1年生に読んでほしい本や教員自身が著わした本についての説明文を1冊の冊子にまとめる。



8. 「シリーズ人間科学」の出版：「食べる」「老いる」「助ける」「感じる」などの人の暮らしをタイトルにして、人間科学研究科の学際的な研究内容を高校生以上の読者を対象に紹介するシリーズ本の出版。



3 運営体制（平成 29 年度）

○未来共創センター構成員

・未来共創センター

中道 正之 教授（センター長）

岡田 千あき 准教授

鈴木 広和 准教授

Don Bysouth 准教授

孫 美幸 講師

大久保 将貴 助教

渥美 公秀 教授（兼）

稲場 圭信 教授（兼）

白川 千尋 教授（兼）

山中 浩司 教授（兼）

岡部 美香 准教授（兼）

国際交流室

Scott North 教授 [室長]

安元 佐織 講師

藤田 直生 事務補佐員

学生支援室

吉川 徹 教授 [室長]

前馬 優策 講師

堺屋 真紀 事務補佐員（2018 年 1 月まで）

山田 雅代 事務補佐員（2018 年 2 月より）

サイバーメディア室

前迫 孝憲 教授 [室長]（兼）

宮本 友介 助教

Spence Zaorski 助教

Ⅱ. 活動報告

未来共創センター 平成 28 年度 活動概要

① 人間科学セミナー・・・・・・・・・・・・・8 回実施延べ 342 名参加

6 月 8 日	「人口変動と人口移動 ーラオス中部の農村より」（白川 千尋 教授）
6 月 30 日	「アジアにおいて百年に渡りザリガニを食することー日本の皇室ビスクから中国におけるスパイシーザリガニのオンライン購入まで、1916-2016 年」（張 展鴻 香港中文大學人類學科教授・文學部副院長）※英語講演
7 月 27 日	「行動モニタリングと適応制御の神経メカニズム」 （Markus Ullsperger オットー・フォン・ゲーリケ大学（マグデブルク）自然科学部 心理学研究所 神経心理学講座・行動脳科学センター（マグデブルク）教授） ※英語講演
10 月 10 日	「International Collaborations in Studying Centenarians and Healthy Longevity」 （Peter Martin アイオワ州立大学教授）※英語講演
10 月 19 日	「人間の身体による表現を考えるーインドネシアにおける現代舞踊と現代演劇の事例から」（福岡 まどか 教授）
12 月 7 日	「罪と罰の心理学」（綿村 英一郎 准教授）
2 月 28 日	「哲学的視点からの人間科学研究の模索」（中山 康雄 教授）
3 月 9 日	「様々な集団実験の試み」（釘原 直樹 教授）

② ランチトーク

（大学院生、学生による研究発表、意見交換：インターナショナルカフェ）・・・・・・15 回実施

4 月 19 日	「「お笑い」で共生学！」
4 月 26 日	「軽食をとりながら「本」を通して横のつながりを作る昼休み」
5 月 10 日	「ランチトーク・ミーティング」
5 月 17 日	「「ドキュメント」ってなに？」
5 月 24 日	「対話篇「普通って何？」」
5 月 29 日	「母/父であり、学生であるということ」
5 月 31 日	「「言語化されないことを書く」ための本」
6 月 14 日	「インターネット動画と炎上」
6 月 21 日	「エジプトのラマダン、日本のラマダン（「ラマダン＝断食」ではなく）
6 月 28 日	「【人科の先生が書いた本を紹介する回】本を持ち寄る交流企画」
7 月 5 日	「オネエタレントとはどんな人たちなのか」
7 月 12 日	「対話篇【共食一人はなぜ一緒に食事をするのかー】」
7 月 19 日	「対談【哲学と工学が向き合う持続可能性ー地域コミュニティにおける実践を通じてー】」
7 月 31 日	「大学で、語りえぬ“家族” その 1」

③ 「私の一冊」・・・・・・400 部発行、人間科学研究科教員や学部生等に配布。

④ 高大連携（高校での模擬授業など。教員だけでなく、学生も参加。小、中学校でも実施）

・・・20 回実施（センターが対応したもののみ）

5 月 12 日	大阪商業大学高校 2 年生 59 名、模擬授業
5 月 12 日	京都市立朱雀中学校 2 年生 88 名、出張授業
6 月 15 日	兵庫県立小野高校 48 名、出張授業
6 月 21 日	関西大倉高校 28 名、出張授業
6 月 23 日	京都市立勤修中学校 2 年生、出張授業
6 月 24 日	雲雀丘学園高校、出張授業
7 月 11 日	岡山理科大学高校 1 年生 45 名、出張授業
7 月 14 日	福島県喜多方市立関柴小学校 5・6 年生 55 名、出張授業
7 月 14 日	福島県二本松市立新殿小学校 1ー4 年生 34 名、出張授業
7 月 18 日	福島県二本松市立東和小学校 5・6 年生 85 名、出張授業
7 月 18 日	福島県二本松市立岩代中学校 1ー3 年生 85 名、出張授業
7 月 26 日	岡山県立岡山一宮高校 1 年生 80 名、出張授業
7 月 29 日	岡山県立勝山高校・大阪大学人間科学研究科シンポジウム
8 月 10 日	滋賀県教育委員会教職員研修、出張授業
9 月 5 日	仁川学院中学校、模擬授業
9 月 20 日	大阪府立北千里高校、出張授業
10 月 10 日	大阪府立千里高校、出張授業
11 月 9 日	国立大阪教育大学平野高校 30 名、研究室訪問
12 月 8 日	京都市立春日丘中学校 2 年生、出張授業
12 月 29 日	岡山県立勝山高校 28 名、サルの行動観察実習 出張授業

⑤ 公開講座・・・1 回実施 104 名参加

11 月 19 日「食べる」：キャノピーホール

（講師：八十島 安伸 教授・中川 敏 教授・渥美 公秀 教授）

⑥ まなびのカフェ

（箕面市では阪大人科サイエンスカフェとして実施）・・・10 回実施延べ 312 名参加

4 月 22 日	「日本で育つ「外国人」青年のアイデンティティ」 箕面市多文化交流センター（志水 宏吉 教授）
5 月 27 日	「サルを見て、ヒトを考えるーサルの子育てと協力行動」 箕面市多文化交流センター（中道 正之 教授）
7 月 5 日	「こどもとスポーツ」 應典院（岡田 千あき 准教授）
7 月 8 日	「なぜだまされるのか？振り込め詐欺を科学する」 箕面市多文化交流センター（森川 和則 教授）
9 月 24 日	「エンデの村で食べることーインドネシア東部でのつながりのある暮らし」 箕面市多文化交流センター（中川 敏 教授）
10 月 4 日	「「食べる」ことをみつめる臨床心理学ーこころと食のアラカルト」 應典院（佐々木 淳 准教授）
10 月 25 日	「「それ、私にも効くの？」の科学ー健康情報とのつきあい方」 應典院（木村 友美 助教）
11 月 29 日	「食べることと身の回りの化学物質ー環境ホルモン・化学物質過敏症ってなに？」 應典院（三好 恵真子 教授）
12 月 13 日	「がまんのマシュマローセルフコントロールから始まる色んな力」 應典院（清水 真由子 助教）
2 月 4 日	「日本における教育の国際化」 箕面市多文化交流センター（園山 大祐 教授）

⑦ 「シリーズ人間科学」・・・第1巻『食べる』を2018年3月に刊行。

⑧ その他（未来共創センターの共催等）

5月11日	・第51回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：坂下誠氏：涼海の丘ワイナリー醸造所長）
5月19日	・第61回 教育改革推進セミナー （講師：山口隆司氏：ニューヨーク大学医学部神経科学部門ポストドクトラルフェロー）
5月30日	・第8回 SDP研究会（開発と平和のためのスポーツ研究会） （講師：向山昌利氏：流通経済大学）
6月11日	・第52回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：矢守克也氏：京都大学防災研究所）
6月13日	・第9回 SDP研究会（開発と平和のためのスポーツ研究会） （講師：齊藤一彦氏：広島大学大学院）
6月20日 ・27日	・人間科学研究科生涯教育学/国際社会開発論（ブラインドサッカーをやろう！） （講師：村上重雄氏：日本ブラインドサッカー協会普及・育成部長）
7月11日	・第53回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：箱石和廣氏：岩手県栽培漁業協会種市事務所所長・下学坪之典氏：株式会社ひろの屋代表取締役）
7月18日	・第10回 SDP研究会（開発と平和のためのスポーツ研究会） （講師：神武直彦氏：慶應義塾大学）
8月4日	・第11回 SDP研究会（開発と平和のためのスポーツ研究会） （講師：黒田次郎氏：近畿大学産業理工学部）
8月11日	・第54回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：河村信治氏：国立高等専門学校機構 八戸工業高等専門学校教授・大向清勝氏：久慈広域観光協議会事務局次長）
9月11日	・第55回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：松本良治氏：野田村役場 復興むらづくり推進課課長）
10月11日	・第56回 大阪大学野田村サテライトセミナー コミュニティ・ラーニング報告会 （報告者：大阪大学院生12名）
11月11日	・第57回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：小野寺信子氏：かまどのつきや代表・野田村大学校長）
12月10日	・生き方死に方を考える社会フォーラム公開シンポジウム （講師：石蔵文信氏：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター招へい教授）
12月11日	・第58回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：縣秀彦氏：国立天文台准教授・普及室長）
12月19日	・第12回 SDP研究会（開発と平和のためのスポーツ研究会） （講師：村上忠明氏：NPO 法人こどもたちのアジア連合代表理事・NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター特別代表）
1月11日	・第59回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：村井雅清氏：被災地 NGO 協働センター・顧問）
1月19日	・第64回 教育改革推進セミナー・ブレ FD 研修 （報告者：大阪大学院生1名、学部生1名）
2月11日	・第60回 大阪大学野田村サテライトセミナー （講師：これまでの村民講師のみなさん）

1 人間科学セミナー

○第9回人間科学セミナー

『人口変動と人口移動ーラオス中部の農村より』

講演者：白川 千尋 教授

(基礎人間科学講座 科学技術と文化研究分野／グローバル共生学講座 国際協力学研究分野／未来共創センター)

日時：2017年6月8日(木) 15:00～16:30

場所：北館2階 ラーニングcommons

参加者数：28名

【概要】

少子化は欧米諸国や日本などではかねてから注目されてきたが、近年ではそのほかの国々、たとえば東南アジアのタイやラオスなどでもみられるようになっている。この現象については各種の要因が指摘されてきたものの、国家レベルではなく、より小さな単位の地域レベルでそれが具体的にどのようにして進んでいるのか、いわばミクロな動態とでも言えるものは未だ十分に明らかにされているとは言い難い。

本セミナーで焦点を当てたラオス中部の天水稲作農村の場合、この動態について考えるうえで無視できないのが家族計画の普及である。本セミナーではその動向と背景に関する調査結果を紹介するとともに、女性の間に家族計画が深く浸透していること、その背景にタイへの出稼ぎや政府主導の施策が介在していることなどを指摘した。

以上のプレゼンテーションを受けてフロアとのディスカッションが行われ、フロアからは家族計画の普及に関する理解をより一層深めてゆくうえで重要なコメントがいくつも寄せられた。

【講演者紹介】

総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了、博士(文学)。国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授などを経て2013年4月に本研究科着任。2016年4月より現職。専門は文化人類学。主なフィールドはヴァヌアツ、ラオス。主な研究テーマは呪術と科学の関係、医療協力・社会開発と文化人類学の関係など。青年海外協力隊員、WHO 専門家、JICA 専門家としてヴァヌアツ、サモア、フィジー、ミャンマーでマラリア、フィラリア対策にも従事。

○第 10 回人間科学セミナー

『Hundred Years of Crayfish Eating in Asia: From Imperial Crayfish Bisque in Japan to Online Purchase of Spicy Crayfish in mainland China, 1916-2016

アジアにおいて百年に渡りザリガニを食すること：日本の皇室ビスクから中国におけるスパイシーザリガニのオンライン購入まで、1916-2016 年』

講 演 者：張 展鴻 教授 (Professor Sidney C. H. CHEUNG)

(香港中文大學人類學科教授、文學部副院長)

日 時：2017 年 6 月 30 日 (金) 15:00～16:30

場 所：大阪大学大学院人間科学研究科北館 2 階 ラーニングcommons

参加者数：39 名

＊英語での講演

【概 要】

日本では 1916 年の大正天皇戴冠式において、各国から来日した 2000 人以上の来賓のために、秋山徳蔵料理長がザリガニのビスクを用意した。フランス料理は、皇室や外交の公式イベントによく使われた。ザリガニのビスクは、北海道産ザリガニを用い、秋山のフランス料理経験を基盤にしている。1930 年、ルイジアナのザリガニが日本人によって中国の江蘇省に持ち込まれたが、理由はまだ不明である。当時は、現地で歓迎されなかった。しかし、21 世紀には、盱眙十三香小龍蝦は、全国的に有名な料理となり、ニンニク、わさびなどと並んで高級食材となった。現在、中国のザリガニの総消費量と雇用は大産業となっている。北米から日本へ、日本から中国へ持ち込まれたザリガニ。江蘇省のスパイシーザリガニ料理は、今や、中国本土で迅速な宅配便が届くほぼすべての地域に配達されている。ザリガニは、現代社会で食糧が動員されている多くのケースのほんの一例である。グローバリゼーションのコンテキストで起きるこのような食糧移動と人類がどのように生きているかを再考する。

【講演者紹介】

香港中文大學人類學科教授

文學部副院長



○第 11 回人間科学セミナー

『Neuronal Mechanisms of Performance Monitoring and Adaptive Control 行動モニタリングと適応制御の神経メカニズム』

講 演 者：マルクス・ウルツパーガー 教授 (Prof. Dr. Markus Ullsperger)

(オットー・フォン・ゲーリケ大学 自然科学部 心理学研究所 神経心理学講座、
行動脳科学センター)

日 時：2017 年 7 月 27 日 (木) 15:00~16:30

場 所：大阪大学大学院人間科学研究科 本館 3 階 31 講義室

参加者数：28 名

＊英語での講演

【概 要】

Monitoring for erroneous and unexpected action outcomes is essential to determine when adaptation is needed to optimize goal achievement. First I will give an overview of EEG and fMRI correlates of performance monitoring. Building on current theories relating performance monitoring to reinforcement learning mechanisms, I will discuss which signals are represented in the performance monitoring system and how they are weighted to determine the need for adaptation. The second part of the presentation will focus on neuronal mechanisms of post-error adjustments, such as post-error slowing and post-error attentional regulation.

エラーや予期しない行動結果を自分で監視しておくことは、目標達成のためにいつ適応したらよいかというタイミングを決めるのに必要である。この講演では、まず、行動モニタリングに関連した脳波と fMRI の知見について概観する。行動モニタリングと強化学習メカニズムを結びつけた現在の理論に基づき、行動モニタリングにおいてどんな信号が使われ、それがどのように重みづけられて適応の必要性が決まっているかについて論じる。講演の後半では、エラーをした後の調整（エラー直後に生じる反応時間の遅れや注意制御）について述べる。

【講演者紹介】

Department of Neuropsychology, Institute of Psychology, Faculty of Natural Sciences,
Otto von Guericke University Magdeburg, GERMANY

○第12回人間科学セミナー

『International Collaborations in Studying Centenarians and Healthy Longevity』

講演者：ピーター・マーチン 教授 (Prof. Peter Martin)

(Department of Human Development and Family Studies, Iowa State University)

日時：2017年10月10日(火) 16:30～17:30

場所：大阪大学大学院人間科学研究科 北館2階 ラーニングコモンズ

参加者数：19名

*英語での講演

【概要】

Achieving an exceptionally old age is difficult – doing so in good health is even more of a challenge. I will summarize important collaborative efforts by the International Consortium of Centenarian Studies (ICC) and highlight longevity differences and similarities across countries.

長寿を達成することは難しいことです。健康に長寿を達成することはさらに難しいことです。今回のセミナーでは、現在国際的な百寿者研究のネットワークである International Consortium of Centenarian Studies (ICC)で私が行っている共同研究の紹介をします。また、これまでに分かってきた長寿に関する要因の国際比較調査でわかったことも紹介します。

【講演者紹介】

Department of Human Development and Family Studies, Iowa State University



○第13回人間科学セミナー

『人間の身体による表現を考える：インドネシアにおける現代舞踊と現代演劇の事例から』

講演者：福岡 まどか 教授（基礎人間科学講座 人類学研究分野）

日時：2017年10月19日（木）15：00～16：30

場所：北館2階 ラーニングコモンズ

参加者数：30名

【概要】

今回のセミナーでは、身体による表現に焦点を当てて、私の調査地であるインドネシアから2つの事例を紹介しました。

ひとつは、現代舞踊の創作においてダンサーたちがどのような身体表現を生み出してきたのかという課題です。伝統的要素を現代舞踊に取り入れる手法や、若い世代のダンサーが作りだした新たなジャンルなどについて、映像資料を用いて紹介しました。

またもうひとつは、言語と身体表現との関係を考えるという課題です。ここでは、詩とそこから連想されるイメージを、身体を通して表現する手法について考えました。短い詩を事例にして実際に私がいくつかのポーズを演じて、またそれを組み合わせて作品を構成する手法についても紹介しました。私の演じるポーズから会場の皆さんがどのようなイメージを連想するのかということも一緒に話し合ってみました。

私たちの普段の生活の中では、身体を通してコミュニケーションをとることについて深く考える機会はあまり多くないかもしれません。質疑応答の中では、日本の芸能との関連について、インドネシア舞踊の特徴について、身体動作の普遍的共感の可能性についてなど、興味深い議論が見られました。このセミナーを通して、表現する身体の可能性についてともに考える機会を持つことができたのではないかと考えます。

【講演者紹介】

1987年東京芸術大学音楽学部楽理科卒業。1992年東京芸術大学大学院音楽研究科修了、修士(音楽)。1988－1990年まで文部省アジア諸国等派遣留学生としてインドネシア国立舞踊アカデミー(現インドネシア芸術大学)バンドン校に留学し、ジャワ島・スンダ地方の舞踊を習得して以来、インドネシアを中心とする東南アジア芸能の調査・研究に従事。1998年総合研究大学院大学文化科学研究科修了 博士(文学)。2004年から大阪外国語大学地域文化学科インドネシア語専攻助教授、2007年から大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学専攻准教授、2016年から同基礎人間科学講座准教授。2017年2月より現職。専門は民族音楽学、人類学、地域研究(インドネシア)

主な著作：『ジャワの仮面舞踊』(2002年 勁草書房)、『性を超えるダンサー ディディ・ニニ・トウォ』(2014年 めこん)、『ジャワの芸能ワヤン その物語世界』(2016年 スタイルノート)、『インドネシア上演芸術の世界』(2016年 大阪大学出版会)

○第14回人間科学セミナー 『罪と罰の心理学』

講演者：綿村 英一郎 准教授（人間行動学講座 社会心理学研究分野）

日時：2017年12月7日（木）15：00～16：30

場所：北館2階 ラーニングコモンズ

参加者数：58名

【概要】

本セミナーでは、量刑判断をテーマに取り上げ、その先行研究や講演者自身の研究をいくつか紹介した。近現代の量刑判断は制度依存的ではあるが、素朴理論的な側面として、ある種の信念（本セミナーで紹介したのは「公正世界信念」）にも導かれた意思決定である。このあたりは「集団的動物」としてのヒトの性質を反映している可能性も示唆される。

セミナー前半では、このことをわかりやすく実証した研究2例を紹介した。セミナーの後半では、「もっとリアルな実験状況に」というスタンスで、実際に似せた刑事裁判ビデオを材料としたときに実験参加者たちがどのような評議を行いどう量刑を決めるのかについての研究を紹介した。最後に、フロアを交えた活発なディスカッションを行った。

【講演者紹介】

1978年横須賀市生まれ。2003年3月東京大学文学部を卒業後、4年間公務員として勤務。その後、2007年4月東京大学大学院人文社会系研究科修士課程に復帰。2012年3月に博士後期課程を修了し、同年4月に博士号（心理学）を取得。慶應義塾大学で大学訪問研究員（兼・特別研究員）、東京大学大学院人文社会系研究科・助教を経て、2017年4月より現職。専門は法廷心理学。量刑判断や死刑判断を通じてのヒトの正義観や規範意識の分析を研究している。



○第 15 回人間科学セミナー

『哲学的視点からの人間科学研究の模索』～最終講義～

講 演 者：中山 康雄 教授（基礎人間科学講座 科学哲学分野）

日 時：2018 年 2 月 28 日（水）15：00～16：30

場 所：人間科学部 本館 キャノピーホール（51 講義室）

参加者数：45 名



【概 要】

私が人間科学研究科に着任したのは、27 年前のことになります。この最終講義では、私が人間科学研究科にたどり着く前とその後の歩みを、私の哲学研究の紹介を交えてお話ししました。私はもともと理学部の出身ですが、高校の頃は、文学や哲学にも興味を持っていました。そして、哲学の勉強はドイツの大学で始めることになります。博士課程を修了するまでに、私はさまざまな分野の研究に接することになります。私が接した学問分野には、哲学の他に、物理学、数学の基礎研究、論理学、情報工学（人工知能研究）、言語学、ドイツ文学、芸術史などがあります。こうした経験を通して、人間をさまざまな角度から探究する視点を学んでいきました。その後、大阪大学で働くようになりますが、人間科学研究科は多角的な関心に従って哲学の研究を続けることを私に可能にしてくれました。

最終講義では、人間科学研究科でお世話になってきた先生方や何らかの形で接点があった学生さんたちがいらしてくれて、熱心に聞いてくださり、とてもいい思い出になりました。主催された先生方や進行を担当された先生方や学生さんたちに感謝いたします。

【講演者紹介】

静岡県立浜松北高等学校卒業後、1975 年京都大学理学部卒業。1976 年より 1980 年までハイデルベルク大学において哲学を専攻。その後、ベルリン自由大学において哲学を主専攻とし、1983 年に修士課程を修了、1987 年に哲学博士（Dr. phil）を取得し、博士課程を終了した。1988 年に、ダイムラー・ベンツ株式会社ベルリン研究所研究員に採用された。1991 年に大阪大学人間科学部助教授に採用され、1996 年に教授に昇任し、現在にいたる。専門は哲学であり、とりわけ、科学哲学、言語哲学、分析形而上学などの分野で研究している。これらの分野での 8 冊の日本語による単著がある。これに加え、英語、日本語、ドイツ語による論文が多数ある。日本科学哲学会、科学基礎論学会、応用哲学会、関西哲学会などで委員をつとめたことがある。

○第 16 回人間科学セミナー

『様々な集団実験の試み』～最終講義～

講 演 者：釘原 直樹 教授（基礎人間科学講座 科学哲学分野）

日 時：2018 年 3 月 9 日（金）15 時 00 分～17 時 00 分

場 所：人間科学部 本館 キャノピーホール（51 講義室）

参加者数：95 名



【概 要】

これまで、人間のネガティブな側面、特にパニックなどの群集行動や集団の中で起きる怠けなどについて研究してきました。「疾風に勁草を知る」という言葉があります。人間の本性は危機事態や逆境において露になることが考えられます。そのために電気ショックが与えられることを実験参加者に予期させることにより危機的事態を構成し、そのうえで集団脱出実験を行ったり、参加者に綱引きをさせて社会的な手抜きが発生する過程などについて検討しました。その他にも危機事態の同調実験や参加者にヘルメットを着用させての群集衝突実験などを実施してきました。ただ最近は研究倫理が厳しく問われるために、この種の研究を行うことが難しくなっているという現実もあります。

「研究とは人が普段目にしているものと同じものを見て、人と違うことを考えるものである」と比較行動学者のローレンツは述べています。私は上記のような様々な実験を工夫することによって、常識とは違う側面から現象を眺めるべく努力してきました。

本講義では過去に実施した実験の紹介をしました。最終講義には、本研究科の先生方や社会心理学研究室の OB、それに学生や院生の方々に出席して頂きまして、感謝しています。

【講演者紹介】

1975 年 3 月熊本大学教育学部卒業、1982 年 3 月九州大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得退学、1982 年 4 月大阪大学人間科学部教務職員、1985 年 4 月九州工業大学工学部講師、1988 年 8 月九州工業大学工学部助教授、1998 年 4 月九州工業大学工学部教授、2003 年 4 月大阪大学大学院人間科学研究科教授。

専門は集団力学及び社会心理学。主な著書は、「パニック実験」（1995 年 ナカニシヤ出版）、「グループ・ダイナミックス」（2011 年 有斐閣）、「人はなぜ集団になると怠けるのか」（2013 年 中公新書）、「腐ったリンゴをどうするか」（2015 年 三五館）、「あなたの部下はなぜやる気のあるふりをするのか」（2017 年 ポプラ社）、「スケープゴートリング」（共編著 2014 年 有斐閣）

2 ランチトーク

○第9回 ランチトーク：「お笑い」で共生学！

講演者：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程2年）

日時：4月19日（水）12：10～12：55

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：14名

【概要】

2017年度の初回は、昨年度主に司会進行を務めていた内田が話題提供者となり、『「お笑い」で共生学！』というテーマでプレゼンと全体討議を行った。プレゼンではまずYouTubeでアンジャッシュのコント『医者と教師』を鑑賞し、次に内田がその内容を共生学の観点から考察した。その後全体でのディスカッションに移り、必ずしも互いのことを理解し合っていないくてもとにかくその場での会話を続けるという「共生関係」についてさまざまに言葉を交わした。

2016年度に音楽を鑑賞して話し合う回が一度あったが、映像を使用したのは今回が初めてであった。今回の実践により、映像を使うことについて2つのメリットが示唆された。

第一に、全体の雰囲気が柔らかくなりやすい。特に今回は使用した映像がコントであったこともあり、会場は笑い声でつつまれ、参加者の表情がほぐれていた。緊張が解けてゆるやかな雰囲気の中で話し合いができるのはランチトークにとって理想である。

第二に、周りを巻きこみやすい。ランチトーク実施中は話し合いに参加しない人もインターナショナルカフェ内で食事をとっていることが多いが、今回映像を流している間、私たちの輪に入っていない（積極的参加の意思はない）人々も一緒に映像を観ているようであった。その人たちが話し合いに参加することはなかったが、このように参加でも不参加でもないような関わり方が比較的容易にできるのが、映像を使った話題提供であるといえよう。

○第10回 ランチトーク：軽食をとりながら「本」を通して横のつながりを作る昼休み

講演者（司会）：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程2年）

（概要説明）：ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

日時：4月26日（水）12：10～13：00

場所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：13名

【概要】

本企画はランチトーク・スタッフ桂の提案で行われた。まず内田の司会でランチトークの

説明がなされた。次に桂から「これまでのランチトークでは参加者同士の意見の交換はできたが、実際にそれぞれどのような研究をしているのかが、いまいち分からなかった。より直接的にそれぞれの研究や興味を話し合う機会を持ちたかった。」という本企画開催の経緯が語られた。

その後 13 名の参加者がそれぞれ持ち寄った本や、その本と自分の興味や研究の関係について話し合った。その中で、初対面でありながらとても近い興味を持つ参加者同士の出会いや、方法論上の議論に発展するような意見の交換の場面があった。また、「興味を持っていたが普段交流がなかった他分野の学生と知り合うことができた」という声もあり、ランチトークならではの交流の機会となったと言える。

○第11回 ランチトーク：ランチトーク・ミーティング

講 演 者（司会）：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程 2 年）

（概要説明）：ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程 2 年）

日 時：5 月 10 日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館 1 階）

参加者数：10 名

【概 要】

本企画はランチトーク・スタッフ桂の提案で行われた。企画の背景には過去に 10 回ランチトークを開催する中で、スタッフ／参加者という線引きが固定化されてきていることへの懸念や、スタッフとまではいなくてもアイデアを出したい人がいるのではないかと、また単純により良いランチトークに関して話し合うことを通じた交流も可能なのではないかと、という考えがあった。

当日はまず内田の司会でランチトークの説明がなされた。次に桂がこれまで過去 10 回のランチトークのテーマ・内容を振り返り、紹介した。

参加者からは企画内容に関して、現場経験（教師・保育士等）／社会人院生の体験談／対談形式／脳科学と言った理系の研究など人科以外も含め分野の違う人の話などを聞いてみたいという要望があった。また、実施するにあたって、たまには別の曜日してほしい／真ん中のテーブルはない方が対話しやすい、と言った要望や提案があった。

○第12回 「ドキュメント」ってなに？

講 演 者：安藤 歴（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程 1 年）

日 時：5 月 17 日（水）12：10～12：55

場 所：インターナショナルカフェ（本館 1 階）

参加者数：15 名

【概 要】

今回のランチトークでは、ジャン＝リュック・ゴダールの「映画史」の一部を参加者含めて鑑賞し、話し合うという形式で行った。初めに安藤が「映画史」についての最低限の説明を行った後、25 分ほど鑑賞した。終わった後は、感想を言い合うところから始めて、互いに感じ考えた事を共有した。

選んだ作品が難解で、「難しい」という感想が大半であったため、なぜ分かりにくいのか、というところから話を始めた。分かりにくく撮っているのはなぜか、それにどういう意味があるのか、など話は進んだが、時間的な制約もあり、話が発展するところまでいけなかったのが残念であった。

全体として、映像を見ることで話し合う時間が少なくなってしまうことが問題としてあると思われた。だが、映像を見るのは面白いという意見を多くもらい、映像を挟んでランチトークを実施することは好評だった。もう少し、時間配分や進め方を考える必要があると感じた。

○第13回 ランチトーク：対話篇「普通って何？」

講 演 者（司会）：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程2年）

日 時：5月24日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：15名

【概 要】

今年度は月に1回程度、「対話篇」と題して哲学対話を行う。今回のテーマは「普通とは何か？」であった。序盤は「多数派に同調すること」「人と同じようにすること」などが挙がり、これらに対してネガティブな印象を抱く参加者もいた。中盤はそれに対して反論する形で、普通であることで身を守ることもあるなど、「普通」にポジティブな意味を見出す見解が提示された。終盤にはそれぞれが考える「普通」の具体例が多く挙がり、最終的に、「普通」には「多数派」としての普通と「理想・規範」としての普通の大きく2種類があるのではないかと、という暫定的な結論にたどり着いた。

今回初参加の学部生がよく発言していたので、どういう関心でランチトークに参加しようと思ったのか尋ねたところ、実はランチトークが開催されるとは全く知らず、単に空いている席で弁当を広げているといつの間にか巻き込まれたのだという。今年度は幸いにも毎回多くの方に参加いただけているが、大人数でテーブルを囲むと仰々しくなり、少し近寄りやすい雰囲気になりかねない。今回のように図らずも途中参加してしまうような可能性を担保するために、テーブルの配置や軽食の出し方を工夫する必要がある。

○第14回 ランチトーク：母／父であり、学生であるということ
【Being a Mother/a Father and a Student】 with
SWITCH (Students with Children)

講演者（概要説明・司会）：ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

日 時：5月29日（水曜日）12:10～13:00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：7名

【概 要】

ランチトーク初のコラボレーションとして、阪大の子育て学生ネットワーク“SWITCH (Students with Children)”と共同での開催となった。

他大学や他研究科の院生、人科の院生、学部生、教員など様々な立場、状況の参加者間でそれぞれの経験が話し合われた。ジェンダーロールと育児、プライベートな家族の状況など、少人数ならではの踏み込んだ対話となされる場面もあった。

○第15回 ランチトーク：『「言語化されないことを書く」ための本』

講 演 者（司会）：ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

日 時：5月31日（水）12:10～13:00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：13名

【概 要】

調査時に生じうる課題、例えば、インタビューで研究対象者が「言語化しない」ことや、研究者がフィールドワークなどで身体的、経験的に感じ取ることができても言語化が容易でないことをいかに記述することができるかを話し合うための企画を行った。

その際、本を紹介し合うことで具体的にどのような考え方のもと、どのような方法論が採用できるかを具体的に話し合う、という狙いがあった。

参加者からは過酷な労働現場に入り込んだ経験を「小説」としてアウトプットするといった学術に必ずしも限定されない手法や、調査者自身の経験を再帰的に記述しうる方法論にまつわる本が紹介された。

学術研究を行う際の倫理的課題に関して、それぞれ得られるものがあったのではないかと感じられた。



○第16回 ランチトーク：インターネット動画と炎上

講 演 者：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程2年）

日 時：6月14日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：15名

【概 要】

第9回の「お笑い」が好評だったこともあり、また第12回でスタッフの安藤が映画を用いて話題提供したこともあったので、映像シリーズとして第3弾を打ち出したのが今回である。

当初は岡崎体育『感情のピクセル』を鑑賞する予定であったが、当日は急遽『shelter』という別のアニメーションに動画を差し換えた。こちらのほうが面白いだろうと思って変更したものの、告知と異なる内容での開催に戸惑う声も多く、結果として盛り上がりを欠いた。一度告知したらその通りやり抜くことの大切さが分かった。

○第17回 ランチトーク：エジプトのラマダン、日本のラマダン（「ラマダン＝断食」ではなく）

講 演 者：Abdelrahim Elhadedy（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

日 時：6月21日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：15名

【概 要】

イスラーム教徒にとって重要なラマダン月のもつ、文化的な側面を中心に講演と質疑を行った。

講演者の Elhadedy からは、ラマダン月に実践されるアラビア語の「サウム」は、食事をだけでなく、飲み物も断ち、悪行、性行為をしないとされた幅広い意味を持つため「断食」と訳すのは間違いであるという説明などがなされた。また、エジプトの写真を通して、色とりどりに飾られる街や、ランプを贈り物にするなどエジプト文化としてのラマダンが紹介された。桂は、日没後の食事会の様子など、日本での身近なところにあるラマダンの実践を紹介した。

通常よりも講演時間が長く、対話にとる時間が短くなってしまったという反省点はあるものの、教員を含めた参加者との活発な質疑がなされた。また数名の参加者が終了後もその場に残り、意見を交換する姿も見られた。

○第18回 ランチトーク：【人科の先生が書いた本を紹介する回】本を持ち寄る交流企画

講 演 者（司会）：ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

日 時：6月28日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：4名

【概 要】

4月から毎月「本を持ち寄る交流企画」を行っており、今回は参加者の指導教員の著作というテーマで本を紹介しながら議論した。

元教職の教育社会学を専攻する参加者は、志水宏吉『教育社会学への招待』を紹介した。教室外の要因により問題が生み出されるという知識によって、問題を教師がひとりで背負い込んでも仕方がない場合があるという考えができるようになったと言う。それに対し、現状への疑問を扱えないので、教育の現状を肯定してしまうのではないかと疑問が唱えられ、議論が交わされた。

科学哲学を専攻する参加者は中山康雄『現代唯名論の構築』を紹介した。分析哲学という潮流の中で、形而上学が廃れたのちに復興してきたが、今も科学や言語哲学の立場から批判にされていると言う。これに対し、なぜ科学をそもそも気にすべきなのかという疑問が唱えられ、議論が交わされた。

共生社会学を専攻する参加者は千葉泉『「自分らしさ」を心の中心に』を紹介した。「自分らしさ」の喪失と回復が主題の文章であり、研究において失われがちな「自分らしさ」の重要性に気付かされ、励まされると言う。書籍には作曲者・演奏家でもある著者が収録したCDが付属しており、慣例に囚われない自分らしさと研究が結びついたアプローチの実例としての指導教官が語られた。

○第19回 ランチ・トーク：「オネエタレントとはどんな人たちなのか」

講 演 者：佐藤 泉（社会学科目 文化社会学3年）

日 時：7月5日（水）12：10～12：55

場 所：インターナショナル・カフェ（本館1階）

参加者数：14名

今回はいわゆる「オネエタレント」と呼ばれている人たちについての話題を提供してもらい、彼らの性自認、性的志向がどういったものであるのか、またなぜ彼らは大衆受けするのかについて考えた。

オネエタレントは「女性に扮している男性」であることが共通項だと考えられるが、既知のオネエタレントを見ていくと、性別適合手術を受けているか否か、パートナーが男性であるか女性であるかなど、それぞれのジェンダー観は多様であった。

一方でオネエタレントの中には、その動機が信条的理由によるものではなく、その場限りの芸のためである者もいることが見て取れた。

しかし人間科学を学んでいる我々の知見からすれば、性的マイノリティを淘汰することは慎むべきことだと容易に想像ができるだろう。近年はオネエタレントの活動事例も増え、それらが異質なもので笑いを取ることを目的としている側面を依然として持つ中、多様性を発信し、それらを受け入れていくことを促すものとしての側面を持ち始めているのではないだろうかとも考えられた。

文責：金井 宏築

○第20回 ランチトーク：対話篇【共食 一人はなぜ一緒に食事をするのかー】

講演者（司会）：内田 桃子（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士前期課程2年）

日 時：7月12日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：8名

【概 要】

2016年度後期までは「哲学カフェ」の名称で対話を開催していたが、時間やメンバーの条件が「哲学カフェ」と大きく異なることから、「対話篇」と呼ぶことにした。

今回のテーマは報告者の強い希望により採択されたものである。報告者は子どもの頃から誰かと一緒に食事をするのが非常に苦手であり、緊張が強いときは強烈的な吐き気に襲われて席についていることも不可能になることがある。なぜこれほどまでに苦手なのか、また実際にこういった苦手意識を持っている人が他にどのくらいいるのかが知りたくて、このテーマを選んだ。

結果として、参加者の約半数が大なり小なり共食に対して苦手意識を持っていることが分かった。

○第21回 ランチトーク：対談【哲学と工学が向き合う持続可能性 ー地域コミュニティにおける実践をつうじてー】

講演者：小川 歩人（未来共生学講座 共生の人間学研究分野 博士後期課程2年）

堀 啓子（工学研究科 環境エネルギー工学専攻 博士後期課程2年）

日 時：7月19日（水）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：17名

【概 要】

ランチトークとして初めて、人間科学研究科以外の方を話題提供者として招いた。

対談者である小川と堀は、超域イノベーションプログラムの同期生である。ランチトークの目的は院生どうしの横のつながりを深めることであるが、その「横」の意味するところには、人間科学以外の領域も含まれていて然るべきである。

今回はその「横」の幅を広げる端緒として哲学×工学の対談を依頼したが、今後はさらに他研究科や他大学、社会から広く話題提供者をお招きしたい。

文責：内田 桃子

○第22回 ランチトーク：『大学で、語りえぬ"家族" その1』@インターナショナルカフェ（共催：大阪大学子育て学生ネットワーク SWITCH）

講 演 者：桂ノ口 結衣（文学研究科 臨床哲学 博士後期課程1年）

ウスマン 桂（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士前期課程2年）

日 時：7月31日（水曜日）12：10～13：00

場 所：インターナショナルカフェ（本館1階）

参加者数：8名

【概 要】

子育てネットワークの SWITCH との第二回コラボレーション企画。「研究とプライベートは切り離せないはずなのに、大学でなぜ家族の話がしづらいのか、する必要がないと感ずるのか」という疑問から対話が始まった。

そもそもキャンパスの雰囲気にもよるのではないかという話の流れから、大阪外国語大学時代の箕面キャンパスを知る参加者二人から、阪大と当時の外大の違いが指摘された。外大は小さい分、学生同士や教員が自然に“人與人”として関係しうる、プライベートの集合としてのパブリックという雰囲気があったが、阪大の場合は良くも悪くも“研究室“単位で擬似的な宗派や家族のようなものが形成されるため、そのようなパブリックが意識されにくいのではないか、という違いに関する議論がなされ、公と私の関係について考える機会となった。

子育てや介護など、家族にまつわる話に関しては大学外にも色々場所があるため、必ずしも大学内でする必要はないのではないか、という意見が出る一方で、大学が中心となって外部で話す機会がない人にとっては、やはり学内で話す場があるというのは選択肢としてあることは大きな助けとなるといった多様な立場からの意見が交わされた。対話の中では実際に子育てに関する悩みなども話され、その選択肢の一つとしてのランチトークの可能性が確認された。



3 冊子『私の一冊』の作成と配付

ー1年生必修科目『人間科学概論』教材としてー

2016年4月の人間科学研究科の改組に伴い、学部1年生の前期の必修科目である『人間科学概論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』の4科目が、『人間科学概論』の1科目に統合された。新しく設置された『人間科学概論』の目的は、「初年次学生が人間科学とはどのような学問で、どのように学ぶのか、あるいは、どのような課題に、どのように取り組むのかなどについて、双方向・参加型の授業やグループ討議などを通して学ぶこと」である。

2016年に引き続き、2017年度においても前期に開講された本科目の授業では、世話人教員として岡部准教授と中道が、さらに、篠原教授、高谷准教授、西森准教授、河森教授も加わり、学生が人間科学部の学際性を体感しながら、人間科学の歴史、研究倫理なども学び、考え、意見を交える授業展開を目指した。大学院生20余名が参加して、小グループになった1年生に、研究活動などを伝え、1年生が質問する機会も設けた。学生には4回のレポート提出を課し、全ての教員が分担してコメントをつけて、返却した。

『人間科学概論』のこのような新しい授業取組の一つとして、本年も『私の一冊』を取り入れた。2016年度に、人間科学研究科教員に、1年生に読んでほしい本1冊とその本の内容、なぜ読んでほしいのかなどを1000字ほどで書いていただいた。新たに執筆していただく、あるいは前年度紹介した本とは別の本を紹介するなどして、2017年度版では、70余名の教員から本を紹介してもらうことができた。さらに、2017年度版では、人間科学研究科教員のご自身の著書を紹介していただくコーナーである「自著を語る」を設けた。この「自著を語る」には10名ほどの教員から寄稿していただくことができた。ご執筆をいただいた先生方には、深く感謝いたします。

受講生には冊子に紹介されている本を1冊読み、5,6名のグループ内で内容を紹介するとともに、書評を執筆してもらった。グループ内で同じ本を紹介することもあったが、他の学生の視点などを知ることが良かった、他の学生の紹介した本を読みたくなった、など、学生からは積極的な姿勢で取り組めたことをうかがわせるコメントが届いている。また、興味深いことに、『私の一冊』に紹介された本のほとんどが、受講生140余名の誰かが読んでいた。この事実は、紹介された本が広範な分野におよんでいるだけでなく、人間科学部学生の関心の幅広さを示唆していると思う。さらに、『私の一冊』を読むことによって、「入学時に考えていた希望分野だけでなく、他の研究領域にも関心が広がった」などの学生の感想が、2016年度と同じように、2017年度にもあった。

『私の一冊（2017年版）』は人間科学研究科の全教員にも配布した。一部の先生から、今年も、『私の一冊』は面白かった、という言葉をしていただくことができた。嬉しいことです。

（文責 中道正之）

4 高大連携

未来共創センターで対応した高等学校での出張授業、高校生の研究室訪問等は 11 校で、合計約 400 名の高校生を対象とした活動を実施した。さらに、5 校の中学校に対して、出張授業、研究室訪問等を行った。3 校の小学校でも出張授業を実施した。そして、教員を対象にした出張講義も 1 ヶ所行った。出張授業、研究室訪問等では、教員が主に対応したが、同時に、学部生、大学院生も参加した。

参加した学生たちには、教員の模擬授業や研究紹介の合間に、学生生活や研究内容を高校生や小中学生にわかりやすく伝えることを求めた。学生からは、「5 分から 15 分ほどのわずかな発表の時間であっても、事前準備やその場での対応力の重要性を実感した」などの報告を得た。このことは、「高大連携」を大学から高校等への一方向の情報提供とするだけでなく、学生教育の場ととらえることが可能であることを示唆している。

なお、未来共創センターが関わった下記の「高大連携」一覧以外にも、人間科学研究科教員が個別に高校等での出張授業、研究室訪問に対応していることも付記する。

・20 回実施（センターに連絡があったもの）

- 5月12日 大阪商業大学高校2年生59名、模擬授業（中道 正之 教授・院生2名・学部生1名）
- 5月12日 京都市立朱雀中学校2年生88名、出張授業（孫 美幸 講師・学部生2名）
- 6月15日 兵庫県立小野高校48名、出張授業（中道 正之 教授・院生1名）
- 6月21日 関西大倉高校28名、出張授業（中道 正之 教授・学部生1名）
- 6月23日 京都市立勧修中学校2年生、出張授業（孫 美幸 講師・学部生1名）
- 6月24日 雲雀丘学園高校、出張授業（八十島 安伸 教授・院生1名）
- 7月11日 岡山理科大学高校1年生45名、出張授業（中道 正之 教授）
- 7月14日 福島県喜多方市立関柴小学校5・6年生55名、出張授業（中道 正之 教授）
- 7月14日 福島県二本松市立新殿小学校1－4年生34名、出張授業（山田 一憲 講師）
- 7月18日 福島県二本松市立東和小学校5・6年生85名、出張授業（中道 正之 教授）
- 7月18日 福島県二本松市立岩代中学校1－3年生85名、出張授業（中道 正之 教授）
- 7月26日 岡山県立岡山一宮高校1年生80名、出張授業（中道 正之 教授）
- 7月29日 岡山県立勝山高校・大阪大学人間科学研究科シンポジウム（大阪大学大学院人間科学研究科：栗本 英世 教授・中道 正之 教授・山田 一憲 講師・院生1名/岐阜大学大学院工学研究科：寺田 和憲 准教授・院生2名/一橋大学大学院社会学研究科：久保 明教 准教授・院生2名/京都大学大学院文学研究科：上野 将敬 氏：学振特別研究員）
- 8月10日 滋賀県教育委員会教職員研修、出張授業（孫 美幸 講師・学部生1名）
- 9月5日 仁川学院中学校、模擬授業（西森 年寿 教授）
- 9月20日 大阪府立北千里高校、出張授業（中道 正之 教授・院生1名）
- 10月10日 大阪府立千里高校、出張授業（Scott North 教授・院生1名）
- 11月9日 国立大阪教育大学平野高校30名、研究室訪問（白川 千尋 教授・中野 良彦 准教授・後藤 遼佑 助教）
- 12月8日 京都市立春日丘中学校2年生、出張授業（孫 美幸 講師・学部生1名）
- 12月29日 岡山県立勝山高校28名、サルの行動観察実習 出張授業（中道 正之 教授・山田 一憲 講師）

5 公開講座

◎ 第二回市民公開講座 「食べる」

講演者：『「食べる」の中の「学び」』

八十島 安伸 教授（行動生態学講座 行動生理学研究分野）

『フローレス島でごちそうを食べる』

中川 敏 教授（基礎人間科学講座 人類学研究分野）

『ツールとしての炊き出し ―災害救援における食の意味―』

渥美 公秀 教授（未来共生学講座 共生行動論研究分野）

日時：11月19日（日）13：30～

場所：本館 51 講義室

（キャノピーホール）

参加者数：104 名



「第二回市民公開講座」本館 51 講義室（キャノピーホール）

【概要】

○「食べる」の中の「学び」

八十島 安伸 教授（行動生態学講座 行動生理学研究分野）

私たちの誰もが、「食べる」ことを毎日経験しています。自分は好きな食べ物であっても、別の人はそれが嫌いであったり、逆に、自分は嫌いなのに他の人には非常に好まれる食べ物があります。なぜ、「好き嫌い」にはそのような多様性があるのでしょうか。それは、「好き嫌い」には、人それぞれでの「学び」が関係する場合がありますからです。今回は、動物やヒトでみられる「好き嫌い」を例として「食における学び」を紹介しながら、「食」を多面的に考えてみる手がかりを紹介します。

○フローレス島でごちそうを食べる

中川 敏 教授（基礎人間科学講座 人類学研究分野）

わたしの調査地、インドネシア、フローレス島のエンデと呼ばれる人びとを対象とします。エンデの村落社会は（市場経済の影響は少なく）贈与経済を基盤に成り立っています。市場経済は人と人とを切り離す機能をもっていると言えます。お金を払って、商品を受けとれば、交換にかかわった人たちとの関係はなくなります―お店の人と（購入が故に）仲良くなるわけでもなく、お米の作り手に思いをはせるわけでもありません。それに対して、贈与は人と人とを結びつけます。この講演ではエンデの食事に焦点を絞って、食べることがどのように人と人とを結び付けるかを述べました。

○ツールとしての炊き出し ―災害救援における食の意味―

渥美 公秀 教授（未来共生学講座 共生行動論研究分野）

災害時には、避難所でも仮設住宅でも近隣の人々やボランティアの手によって炊き出しが行われる。もちろん、被災者の皆様の空腹を満たすために炊き出しが行われる時期もある。しかし、災害後かなり落ち着いてからも炊き出しは続く。もはや、空腹を満たすことが主たる目的ではない。食事を介して、被災された方々の中でのコミュニケーションを広げるためであったり、さらには、安否確認につなげていくために炊き出しが行われたりする。今回は、熊本地震や東日本大震災での炊き出しの事例を採り上げ、様々な工夫をしている様子を紹介した。参加者からは、「炊き出しに様々な意味があることを知ることができた」、「参加してみたい」といった感想がよせられた。

○茶話会

時 間：16:00～17:00

場 所：本館インターナショナルカフェ

参加者数：55 名

講演終了後、講演者、来場された方々、学生、スタッフと軽食を囲みながら歓談の場をもち、直接交流する機会をつくった。



「茶話会」 本館インターナショナルカフェ

【講演者紹介】

八十島 安伸

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

愛知県生まれ。福島県立医科大学講師、大阪大学大学院准教授を経て、2017 年から同教授。動物モデル系を用いて「好き嫌い」「食べすぎ」の脳機構を研究しています。

中川 敏

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は文化人類学。

1979 年からインドネシア、フローレス島で調査をしています。交換について研究をしています。

渥美 公秀

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

1961 大阪府生まれ。大阪大学人間科学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究科在学中にミシガン大学に留学し Ph.D.（社会心理学）取得。専門はグループ・ダイナミックス。阪神・淡路大震災で被災して以来、災害ボランティアに注目した現場研究を続けている。（認特）日本災害救援ボランティアネットワーク理事長。

6 まなびのカフェ

(2017 年度箕面市立多文化交流センターでは「阪大人科サイエンスカフェ」として実施。)

○第 2 回 阪大人科サイエンスカフェ

「日本で育つ「外国人」青年のアイデンティティ」

講 演 者：志水 宏吉教授（未来共生学講座 共生社会論研究分野）

薮田 直子（教育環境学講座 教育文化学研究分野 博士後期課程）

日 時：2017 年 4 月 22 日（土）14：00～16：00

場 所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：30 名

【概 要】

現在、日本で暮らす外国人の総数は 230 万人、国籍は 190 ヶ国に及びます。

「外国人」と聞いて、どんな人を想像しますか？あなたが知っている外国人は、実際にどんな人ですか？ここでは、関西で暮らす在日外国人の青年の経験をもとに、日本で育つ「外国人」のアイデンティティについて、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

【講演者紹介】

志水 宏吉

大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は教育社会学・学校臨床学。

学校現場に根ざした研究を心がけてきました。外国人を教育の場でいかに支援するかというテーマは、自らの家族とともに 2 年間イギリスで在外研究をした経験がもとになっています。

薮田 直子

大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程在学中、大学院生。

在日外国人教育をテーマに公立の小中学校で現場の観察調査をしながら、日本語支援のボランティアなどを行っています。その他の研究に、朝鮮学校についての研究『日本の外国人学校』（志水宏吉・中島智子・鍛冶致編、明石書店）などがあります。

○第3回 阪大人科サイエンスカフェ

「サルを見て、ヒトを考える～サルの子育てと協力行動～」

講演者：中道 正之 教授（行動生態学講座 比較行動学研究分野）

貝ヶ石 優（行動生態学講座 比較行動学研究分野 博士後期課程1年）

日時：2017年5月27日（土）14：00～16：00

場所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：25名

【概要】

子を抱っこして、おっぱいをあげる。子に「おいで、おいで」や「そっちにいてはダメ」と合図を送る。これは人の母がすることですが、サルの母もします。ヒトの母そっくりですね。ふたりが一緒になって、ひとりでできないことを協力してする。これも人だけでなく、サルでもできることがあります。

サルを見てると、人を、あるいは自分自身を見つめている気分になることもあります。サルを知って、人を知る面白さを、一緒に楽しみましょう。

【講演者紹介】

中道 正之

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

日本霊長類学会会長。ニホンザルやゴリラの顔を覚えて誰が誰と何をしたのかを記録しながら、彼らの心や知性を知る努力をしています。著書に『ニホンザルの母と子』、『ゴリラの子育て日記』。小学生から高校生、社会人の方々に、サルの話をするのも楽しみの一つにしています。

貝ヶ石 優

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程1年生。

学部3年生のときからずっと、ニホンザルの行動研究を継続しています。ニホンザルの協力行動のメカニズムや知性の解明を目指しています。



○第4回 阪大人科サイエンスカフェ

「なぜだまされるのか？振り込め詐欺を科学する」

講演者：森川 和則 教授（人間行動学講座 基礎心理学研究分野）

大工 泰裕（人間行動学講座 社会心理学研究分野 博士後期課程1年）

日時：2017年7月8日（土）14：00～16：00

場所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：20名

【概要】

毎年、日本全体での振り込め詐欺などの特殊詐欺の被害額は数百億円になります。これだけニュース等で頻繁に報道され、警察や銀行などの広報活動で周知されているにもかかわらず多数の被害者がだまされてしまうのはなぜでしょうか？それは人間の心理の特性が関与しているからです。「だます策略」と「だまされてしまう心理」を認知心理学と社会心理学の観点から解き明かし、だまされないための対策を考えてみます。

【講演者紹介】

森川 和則

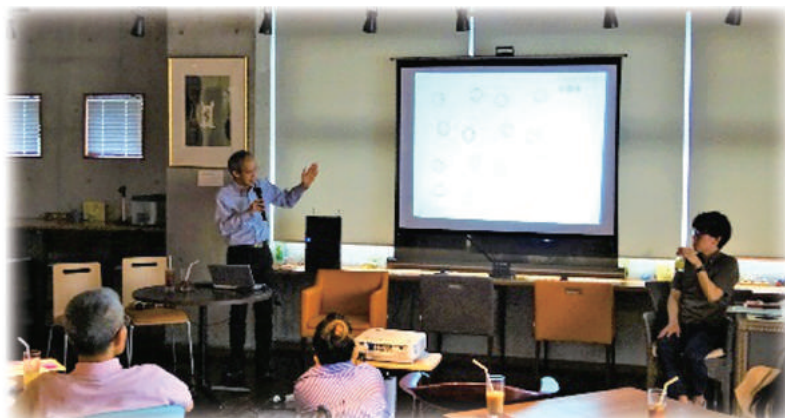
大阪大学大学院人間科学研究科教授。

専門は認知心理学。認知心理学は人間の認知能力（知覚・認識・記憶・言語・判断・思考など）を実験により研究する学問です。私は顔の認知、錯覚、記憶、空間認知、判断、思い違いなどを研究しています。中でも化粧と錯視の関係についての研究は最近マスメディアで取り上げられることが多くあります。

大工 泰裕

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程1年在学中。

専門は社会心理学。社会心理学は、社会における人間の心理（対人関係・集団行動・流行など）を研究する学問です。その中でも、詐欺に騙される心理的メカニズムについて研究を行っています。



○第5回 阪大人科サイエンスカフェ

「エンデの村で食べること～インドネシア東部でのつながりのある暮らし～」

講演者：中川 敏 教授（基礎人間学講座 人類学研究分野）

ムンフバヤスガラン（基礎人間学講座 人類学研究分野 博士後期課程3年）

日時：2017年9月24日（日）14:00～16:00

場所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：24名

【概要】

インドネシアのフローレス島に住むエンデの人びとの間での食べることについてお話しします。エンデの村にはお店はありません。エンデで食べるということは、多くの場合、「与えること、受け取ること」に結びついています。やって来た人には与え、人が食事を出してくれたら、それを受け取る。エンデの人にとって「一人で食べる」ことは考えづらいことですし、「飢える人がいる」ことは想像さえ出来ません。

食事をとおして人びとがむすびつくエンデの村の素敵な暮らし方を紹介したいと思います。

【講演者紹介】

中川 敏

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

文化人類学を勉強しています。インドネシア、フローレス島のエンデと呼ばれる人たちの間でのフィールドワークをしました。日本とはまったく違った暮らし方をするエンデの人を理解し、そして彼らに理解してもらうように努力をしています。著書に『異文化の語り方』『交換の民族誌』『言語ゲームが世界を創る』などがあります。日本ととっても違う社会にも、皆様が興味をもっていただけたら、と思っています。

ムンフバヤスガラン

大阪大学人間科学研究科博士後期課程3年生。

モンゴル国出身。遊牧地域の変化と持続に関する研究をしています。モンゴルの遊牧地域を事例に、開発援助に依存しないコミュニティ再編成と地域の潜在力を検討しています。



○第6回 阪大人科サイエンスカフェ

「日本における教育の国際化」

講演者：園山 大祐 教授（教育環境学講座 教育制度学研究分野）

森口 陽平（教育環境学講座 教育制度学研究分野 博士前期課程2年）

日時：2017年7月8日（土）14：00～16：00

場所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター内）

参加者数：41名

【概要】

日本の教育の国際化という何を思い浮かべますか。英語教育？外国籍児童生徒？帰国子女・海外子女？・・・。

いま、日本には、約200万人の外国人が暮らしています。今後さらに増えると言われています。また政府は年間4千万人の観光客を目標に観光産業に力を入れています。さらに、日本の企業には社内会議を英語化すると言ったことも聞かれます。外国人研修生の受入政策も活発化し、今後外国人と接する機会は増えるでしょう。どのような学校教育が求められているのか。そのときにどんな課題があるのか。学生、地域住民のみなさんと意見交換しながら一緒に考えてみませんか。

【講演者紹介】

園山 大祐

大阪大学大学院人間科学研究科教授。

主にヨーロッパの教育制度について研究しています。外国人の子どもの教育機会の保障とどのような補償教育が施されているか研究しています。主な著書：『岐路に立つ移民教育』ナカニシヤ出版、『教育の大衆化は何をもたらしたか』『フランスの社会階層と進路選択』ともに勁草書房。

森口 陽平

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程2年生。

国際バカロレアの研究をしています。日本とヨーロッパにおける教育の国際化に関心があります。日本の英語教育をはじめとする高校教育における国際化について勉強しています。昨年度半年間フランスのパリ大学に留学して、外国の大学生の国際性について直接肌で接する機会に恵まれました。

◎まなびのカフェ（特別編）

◆こどもとスポーツ

講 演 者：岡田 千あき 准教授（未来共創センター/教育環境学講座 生涯教育学研究分野）

日 時：2017 年 7 月 5 日（水）10：30～12：00

場 所：應典院 気づきの広場

参加者数：36 名

【概 要】

子どもたちを取り巻く環境は劇的に変わりつつあります。新しい大学入試に向けて勉強も心配ですが、体力もつけたい、人間関係も上手くいくように、毎日を楽しく過ごして欲しい・・・親の願いは尽きません。

「そうだ！スポーツさせよう！」

2020 年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。自分がスポーツをしている（していた）人もしていない人も、一度は考えるのではないのでしょうか。スポーツのいい面、悪い面、社会との関係…さまざまな視点から子どものスポーツを考えてみませんか？

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科准教授

早稲田大学卒業後、ジンバブエの女子高等学校に体育教員として勤め、帰国後に広島大学で修士、神戸大学で博士課程を修了(博士：学術)。生涯スポーツ、スポーツと地域振興などを研究テーマとし、ボスニア・ヘルツェゴビナ、カンボジア、東ティモール、南スーダン等での調査・実務経験を持つ。



◎まなびのカフェ『子どもと食を巡る「四方山話（ヨモヤマバナシ）」』

第1回 「食べる」ことをみつめる臨床心理学：こころと食のアラカルト

講演者：佐々木 淳 准教授

日時：2017年10月4日（水）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：41名

【概要】

臨床心理学は困りごとをお持ちの方への援助を考える、実践的な学問です。生きていくうえで必要不可欠な「食べる」というおこないの中に、実はその人のこころや家族のありようが映しだされていきます。こころや家族関係の健康なありかたとはどのようなものなのでしょう。誰にでもある、身近な「食べる」というおこないを糸口にして、臨床心理学からいくつかのトピックスを紹介します。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科准教授

京都大学卒業後、東京大学大学院総合文化研究科修了（学術博士）。認知行動療法の立場から研究と臨床活動を行っています。研究テーマは人前での不安、臨床のテーマは会社員のメンタルヘルスの援助です。



第2回 「それ、私にも効くの？」の科学：健康情報とのつきあい方

講演者：木村 友美 助教

日時：2017年10月25日（水）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：25名

【概要】

「体にいい」とはどういうことでしょうか？現代社会には食や健康に関する情報があふれており、健康情報を読み解く力＝ヘルスリテラシーが求められます。EBM*の重要性が高まるなか、幸せの国ブータンやヒマラヤ地域ではシャーマンによる治療が実際に人びとを癒しているという現実もあります。EBM からシャーマニズムまで、様々な事例をみながら健康情報とのつきあい方について一緒に考えてみましょう。

*EBM, Evidence Based Medicine 科学的根拠にもとづいた医療

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科助教

奈良女子大学食物栄養学科卒業後、京都大学医学研究科修了（社会健康医学博士）。WHO 神戸センター、京都大学東南アジア研究所研究員を経て現職。国内外の調査で訪れた国は10ヶ国以上にのぼり、自身の研究スタイルを「フィールド栄養学」と称す。



第3回 食べることで身の回りの化学物質：環境ホルモン・化学物質過敏症ってなに？

講演者：三好 恵真子 教授

日時：2017年11月29日（水）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：24名

【概要】

人間は、便利さ豊かさを追求するために莫大な人工物質を創り出し利用してきました。今日社会に生きる私たちは、さまざまな化学物質に囲まれ、飲食や呼吸を通じて知らず知らずのうちに体内に取り込んでいます。私たちを不安に駆り立てる環境ホルモン、化学物質過敏症とは何か、どんな影響があるのかを環境科学の視点から分かりやすく解説します。子どもたちの未来をともに考えていきましょう。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科教授

大阪市立大学生活科学研究科修了（学術博士）。東京農業大学農学部助手、大阪外国語大学国際文化学科講師、准教授を経て現職。当方の研究室は、世界各地域の環境問題を扱い、文理を問わず多様な人材が集結するユニークな研究環境を創っている。



第4回 がまんのマシュマロ：セルフコントロールから始まる色んな力

講演者：清水 真由子 助教

日時：2017年12月13日（水）10：30～12：00

場所：應典院 気づきの広場

参加者数：43名

【概要】

「マシュマロをすぐに1つもらう？それともがまんして後で2つもらう？」マシュマロ・テストでは、こどものがまんする力＝セルフコントロールを調べています。セルフコントロールすることで、「今、ここ、自分」という世界からぬけだして、想像したり、他者の気持ちを理解することができます。幼児期に大きく変化するセルフコントロール、そこから始まるいろんな力について考えます。

【講演者紹介】

大阪大学大学院人間科学研究科助教

同志社大学卒業後、大阪大学大学院人間科学研究科修了(博士：人間科学)。保育園や認定こども園において十年以上、こどもの社会性の発達に関する調査経験を持つ。二児の子育ての中では、自らのがまんする力を試されることもしばしばである。



まよぜのカフェ

子どもと食を語る「西方山話(コモママバナシ)」

10/4 (水) 『食べる』ことをみつめる
臨床心理学
～こころと体のつながり～

臨床心理学は脳科とこころのつながりを研究する。実証的な研究です。なぜかこころは不思議な力を持っている。その中に、私たちの生活の中心にある感情の働きが隠れている。こころと体のつながりを探ります。こころと体のつながりを探ります。こころと体のつながりを探ります。

10/25 (木) 『それ、私にも効く?』の科学
～健康増進とつながり～

「健康」とはどのようなことでしょうか?健康は生活習慣や環境に左右されます。健康は生活習慣や環境に左右されます。健康は生活習慣や環境に左右されます。健康は生活習慣や環境に左右されます。健康は生活習慣や環境に左右されます。

11/20 (水) 食べることを身の回りの
止学動機
～食生活と心身のつながり～

人間は、食べ物を食べることで生きています。食べ物は心身のつながりを探ります。食べ物は心身のつながりを探ります。食べ物は心身のつながりを探ります。食べ物は心身のつながりを探ります。

12/13 (水) がまんのマシュマロ?
～セルフコントロールとつながり～

「マシュマロ」はどのような食べ物でしょうか?マシュマロは生活習慣や環境に左右されます。マシュマロは生活習慣や環境に左右されます。マシュマロは生活習慣や環境に左右されます。マシュマロは生活習慣や環境に左右されます。

清水 真由子
大阪大学大学院人間科学研究科助教、同志社大学卒業後、同志社大学大学院人間科学研究科修了(博士：人間科学)。保育園や認定こども園において十年以上、こどもの社会性の発達に関する調査経験を持つ。二児の子育ての中では、自らのがまんする力を試されることもしばしばである。

清水 真由子
大阪大学大学院人間科学研究科助教、同志社大学卒業後、同志社大学大学院人間科学研究科修了(博士：人間科学)。保育園や認定こども園において十年以上、こどもの社会性の発達に関する調査経験を持つ。二児の子育ての中では、自らのがまんする力を試されることもしばしばである。

全日程 全日程10時30分から12時まで (10時15分開場) **参加費 500円** (税込) (お申し込み先着は無料)

申し込み オンライン申込みフォーム 申し込み
<https://goo.gl/forms/yG15HDDLE0ZWY12> 申し込みフォーム

会場 浄土宗徳興院 2階 気づきの広場
〒545-0878 大阪市東区南船場1-2-27

問い合わせ 徳興院事務局
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147
E-mail info@outin.co.jp



out in

38

7 コンポジウム

○中学生サマー・セミナー「音で学問してみよう」

講演者：千葉 泉 教授（未来共生学講座 共生社会論研究分野）

岡部 美香 准教授（臨床教育学講座 教育人間学研究分野）

日時：2017 年 7 月 22 日（土）10：00～12：00

2017 年 8 月 5 日（土）14：00～16：00

場所：本館 インターナショナルカフェ

参加者数：17 名（大阪府下の中学生（7 月 22 日 6 名、8 月 5 日 11 名））

【概要】

大阪府教育委員会が毎年、実施している中学生向けサマー・セミナーに講座を 2 つ提供した。いずれも、外国の民謡を楽しみながら、言葉と言葉以外の音色やリズムがもつコミュニケーション力の謎に迫るというコンポジウムである。コンポジウムとは、音楽を楽しむコンサートと講話・議論を主とするシンポジウムを組み合わせたプログラムを意味している。当日は、簡単なアイス・ブレイキングの後、参加者に、まずは、何の前情報も前理解もないままにチリの民謡の生演奏を聴いてもらい、その世界に想いをはせてもらった。その後、民謡の説明とそれにまつわる講話を聴いて、参加者どうしでコメントや感想を述べあってもらい、人間どうしのコミュニケーションの多層性、多元性について考えてもらった。参加者からは、「音楽を用いた、人とのコミュニケーションについての解説が興味深かった」、「想像力が大切だということを学べてよかった。メタ・メッセージの話を通じて人間科学部に興味をもった」、などの感想が寄せられた。

【講演者紹介】

千葉 泉

大阪大学大学院人間科学研究科教授

1959 年愛知県生まれ。東京外国語大学卒業後、東京大学大学院修士課程修了。

専門は、ラテンアメリカ地域研究とその実践的応用。著書・論文として、「人間科学による一つの狂詩曲—人間科学研究科による利他コンポジウムの報告—」（共著：未来共生学 4 号、2017 年）、『「自分らしさ」をこころの中心に』（単著：多文化共生を考える会、2014 年）、『国際理解に役立つ世界の民族音楽、6：南・北アメリカの音楽』（単著：ポプラ社、2003 年）、『馬に乗ったマプーチェの神々—チリ先住民社会の変遷—』（単著：大阪外国語大学学術双書 19 号、1998 年）など。

岡部 美香

大阪大学大学院人間科学研究科准教授

1970 年大阪府生まれ。大阪大学卒業、大阪大学大学院博士課程修了。博士（人間科学）

専門は、教育人間学、教育思想史。著書・論文として、『子どもと教育の未来を考えるⅡ』（編著：北樹出版、2017 年）、「人間科学による一つの狂詩曲—人間科学研究科による利他コンポ

ジウムの報告―」（共著：未来共生学 4 号、2017 年）、『災害と厄災の記憶を伝える―教育学は
何ができるのか―』（共著：勁草書房、2017 年）、『マナーと作法の人間学』（共著：東信堂、
2014 年）、『教育人間学―臨床と超越―』（共著：東京大学出版会、2012 年）、など。

○野田村調印式・記念コンポジウム

大阪大学大学院人間科学研究科・野田村 大阪大学オムニサイト（OOS）協定調印式

日 時：2018 年 2 月 11 日（日）9:00～12:00

場 所：野田村生涯学習センター（岩手県九戸郡野田村）

参加者数：30 名

調印記念コンポジウム(コーディネーター 渥美 公秀 教授)

第 1 部「津波から今日までの関係」

小田 祐士 村長、貫牛 利一 氏 チーム北リアス現地事務所長

栗本 英世 教授、稲場 圭信 教授、志水 宏吉 教授、モハーチ・ゲルゲイ 助教

ミニコンサート

千葉 泉 教授、稲場 圭信 教授、モハーチ・ゲルゲイ 助教、渥美 公秀 教授、沈^{シム} 栄美^{ヨンミ}(学部生)

第 2 部「これからの関係～協定にもとめるもの」

小田 利一 村長、貫牛 利一 氏 チーム北リアス現地事務所長

川端 亮 教授、中道 正之 教授、稲場 圭信 教授

【概 要】

大阪大学大学院人間科学研究科と自治体との最初の OOS 協定は、東日本大震災・津波で甚大な被害を受け、教員や学生らが、発災直後から継続的に支援・交流・研究活動を展開してきた岩手県野田村との間で結ばれた。

調印式では、小田祐士村長から「野田村全体をキャンパスと思って、引き続き、活動して欲しい」との言葉が告げられ、また、栗本研究科長からは「支援するには、覚悟をもって長期的に」との決意の表明があった。

続いて開催された記念コンポジウムは、第 1 部でこれまでの関係を振り返り、第 2 部でこれからの関係を協定に託して語るパネルディスカッションを行った。協定が婚約に喩えられ、第 1 部では、災害という悲しい出来事の中での自然な出会いと 7 年にわたる関係の深まりがエピソードとともに振り返られ、第 2 部では、これから互いの組織からもっと多様な人々が交流できるように関係を拡充していく展望が語られた。

第 1 部と第 2 部の間には、教員と学生による「それでも桜は咲く（作詞作曲：千葉泉）」の演奏があり、会場の参加者と一緒に歌い上げた。

人間科学研究科附属未来共創センターが中心となって、「シリーズ人間科学」を大阪大学出版会から刊行することになった。それは、次世代を担う学生・大学院生、さらに一般社会の人々に、人の「心」と「暮らし」を対象とした文系から理系までの広範で、多様な個々の研究を共創的、学際的につなげた研究としての「人間科学」の面白さや奥深さを実感してもらうと同時に、人間科学の諸研究分野に若い世代を誘うためである。

そのために、シリーズの各巻の書名を「食べる」「遊ぶ」「育つ」「老いる」などの動詞で表される言葉にした。これらの動詞が正に、人の「心」と「暮らし」を具体的に示す言葉であるからである。しかも、それぞれの動詞は、多様な視点から見て、考え、研究することができる動詞でもある。様々な学問領域で研究を続けている人間科学研究科の教員らが、これらの動詞をキーワードに集い、それぞれの専門性から、互いに語りあうこと、そして発信することが新しい知の創造のきっかけになると思う。

第1巻『食べる』を2017年度の最後の日に刊行することができた。各章のタイトルと執筆者は下記のとおりである。「食べる」が実に多様な視点から語られているのを納得していただけたと思う。第2巻以降では、『老いる』、『助ける』、『感じる』、『教える』、『病む』が準備中である。尚、「シリーズ人間科学」の刊行は2017年度の教授会で承認を受け、それを受けて、「シリーズ人間科学」編集委員会(メンバーは下記を参照)を設置した。同編集委員会で、各巻のタイトル、責任編集者、執筆陣など検討しながら、着実な刊行を目指している。

第1章	「食を通した心の発達」	清水（加藤）真由子
第2章	「サルは共に食べて社会を学ぶ」	中道 正之
第3章	「好き嫌いから「食べる」を捉えなおす」	八十島 安伸
第4章	「食べることは「こころー心理療法から拒食と過食を考えるー」を映す」	竹田 剛・佐々木 淳
第5章	「ツールとしての炊き出しー災害救援における食の意味ー」	渥美 公秀
第6章	「エンデの村で食べること ーインドネシア東部でのつながりのある暮らしー」	中川 敏
第7章	「ヒマラヤ高所における食の変化と病ー「フィールド栄養学」研究から」	木村 友美
第8章	「「食べる」ことになぜ作法が求められるのかー「食べる」に関する教育人間学的考察」	岡部 美香
第9章	「食べることと性一食の哲学に関する一側面」	檜垣 立哉

「シリーズ人間科学」編集委員会委員（アイウエオ順。敬称略、**編集委員長、*副編集長）
渥美 公秀、河森 正人、白川 千尋*、中澤 渉、中道 正之**、入戸野 宏、野村 晴夫、山中 浩司

9 未来共創センターホームページ

人間科学研究科附属未来共創センターの専用ホームページ（以下、HP）を創設することになった（<http://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso>）。

それは、次世代を担う中・高校生や教育関係者、そして一般社会の人々に、未来共創センターの多様な活動の面白さを発信すると同時に、各イベントに足を運んで頂けるような広報活動を促進すること、さらには広範で領域横断的な学問としての「人間科学」への興味をもってもらうためである。

2017 年度にサイバー・メディア室の Spence Zaorski 助教を中心に、センター教員で打合せを重ね、株式会社ケーエスアイとの協力のもと、HP 創設を進めた。

2018 年度に一般公開され、未来共創センターの各活動の紹介の他、イベント実施後の参加者の声など随時アップされる予定である。



OOS とは：

今、様々な社会的課題の解決に向けて、大学と企業、行政、民間組織などが連携して「共創」することが必要とされている。人間科学研究科附属「未来共創センター」は、人々が支え合い、共生できる「場」を創出することを目指すプロジェクトのひとつとして、その「共創」の仕組みを「大阪大学オムニサイト (OOS)」と名付け、2017 年 4 月に始動させた。OOS では、産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援、活用する。

OOS の目指すもの：

OOS の活動を通して得られた様々なデータを収集・分析し、共創知の創出および今後の運営に活用する。また、データ収集・分析に学生が参画するなど、教育・研究実践の場も提供する。将来的にはこれらのデータをもとに AI で、商品、書籍、セミナー・イベント情報などを提供していく。企業・行政・一般市民・研究機関・学生それぞれにとって実りのある「場」を提供できるような仕組みづくりを目指している。

連携組織一覧（協定締結日）：

- 一般社団法人 全国自治会活動支援ネット（2017 年 5 月 15 日）
- 一般社団法人 全国寺社観光協会（2017 年 5 月 15 日）
- 一般社団法人 今井町大和観光局（2017 年 7 月 5 日）
- 岩手県九戸郡野田村（2018 年 2 月 11 日）
- パナホーム株式会社（2018 年 3 月 30 日、なお 4 月 1 日よりパナソニックホームズ株式会社と社名変更）

2017 年度の活動一覧：

- ・連携組織との OOS 協定調印式・意見交換
- ・中河内防災フェア×イザ！カエルキャラバン！in 久宝寺緑地（2017 年 11 月 25 日）：（一社）全国自治会活動支援ネットと「災救マップを使った避難演習」を共催。共生学の学生が「共生学 実験実習Ⅰ」の授業の一環でボランティア参加。行政、自衛隊、企業とも連携して実施。79 組 250 名ほどが「災救マップ」を使った避難演習に参加した。
- ・みまもりロボくん現地視察会（2017 年 11 月 29 日）：（一社）全国自治会活動支援ネットと人科（稲場 圭信教授、渥美 公秀 教授、山田 一憲 講師）、ならびに株式会社ナブラ・ゼロ、NTN 株式会社と開催。生駒市、神戸市、大阪市、泉大津市、東大阪市等から 20 名が参加した。

○野田村 OOS 協定調印記念コンポジウム

日 時：2018 年 2 月 11 日（日）

場 所：野田村生涯学習センター（岩手県九戸郡野田村）

【概 要】

小田 祐士 野田村村長、チーム北リアス現地事務所長 貫牛 利一氏、栗本 英世 研究科長、中道 正之 未来共創センター長、志水 宏吉 教授、川端 亮 教授、稲場 圭信 教授、モハーチ・ゲルゲイ 助教が登壇し、渥美 公秀 教授のコーディネートで「津波から今日までの関係」と「これからの関係～協定にもとめるもの」のパネルディスカッションを行った。こうした議論の途中に音楽で和やかな雰囲気になるのがコンポジウム（コンサート+シンポジウム）で、今回は千葉 泉 教授が震災に想いを馳せて作曲された「それでも桜は咲く」を参加者と一緒に歌った



大阪大学大学院人間科学研究科・岩手県野田村 大阪大学オムニサイト（OOS）協定調印式

（前列右から）貳又 正人 野田村議会議長、小田 祐士 野田村村長、栗本 英世 教授、川端 亮 教授、中道 正之 教授、渥美 公秀 教授

（後列右から）高橋 正志 副村長、稲場 圭信 教授、志水 宏吉 教授、貫牛 利一 氏、モハーチ ゲルゲイ 助教、千葉 泉 教授、石塚 裕子 助教



記念コンボジウム

(右から) ウクレレ：稲場 圭信 教授 ギター：渥美 公秀 教授 千葉 泉 教授
打楽器：^{シム ヨンミ}沈 栄美 (学部生) ピアノ：モハーチ・ゲルゲイ 助教

デ ー リ ー 東 北 2018年(平成30年)2月12日(月曜日) 地 域 (14)

岩手県北

村を実習、研究の場に

村と大阪大大学院人間科学研究科協定締結

野田 田村は11日、大阪大大学院人間科学研究科と「大阪大オムニサイト(OOS)」協定を締結した。震災後、同大は村内に復興支援や相互交流を目的とした活動拠点「大阪大野田村テラライト」を開

設。これまでの実績を踏まえ、今後の連携を図りながら相互交流を継続、発展させたい考え。オムニサイトは英語で「あらゆる道場」という意味。同大は村内をフィールドワーク実習や研究の現場として活用する方針だ。同大によると、自治体とのOOS協定締結は初めて。

同日、村生進学習センターで調印式が行われ、小田祐士村長と栗本英世人間科学研究科長が協定書を取り交わした。同大は震災後、民家の敷地内にサテライトを設置。月1回ほどのベースセミナーを計画再開き、村民と交流を図っている。

小田村長は「協定締結で新たなステージに進むことを期待したい。復興にはハード事業だけでなく、人とのつながりが大きな役割を果たす」と意義を強調。これに対し栗本科長は「復興は現状回復ではなく、新たに何かつくること。大学は村からたくさん学ぶんだ。活動が少しでも村民の役に立ってほしい」と語った。

終了後、コンサートとシンポジウムを組み合わせたイベント「コンボジウム」を開き、今回の協定の求めるものについて考えを深めた。

大阪大学大学院人間科学研究科 岩手県野田村
大阪大学オムニサイト(OOS)協定調印式

協定を締結した野田村と大阪大の関係者

野田村長 小田祐士
大阪大人間科学研究科長 栗本英世
大阪大オムニサイト(OOS)協定調印式

震災後の交流 さらに発展へ

2018年2月12日(月) デーリー東北新聞社に掲載

○パナホーム株式会社との調印式と記者発表

日 時：2018 年 3 月 30 日（金）

場 所：人間科学研究科インターナショナルカフェ

【概 要】

OOS 協定の調印に先立ち、栗本 英世 研究科長が人間科学研究科の紹介を、中道 正之 未来共創センター長が未来共創センターの紹介を、稲場 圭信 教授が大阪大学オムニサイトと本協定に関する説明を行った。OOS 協定調印後には、協定締結を受けて、パナホームの松下 龍二 代表取締役社長が挨拶をし、続いて大阪大学グローバルビレッジ（津雲台）における計画についてパナホーム街づくり営業本部分譲事業推進部長の上田 眞氏が説明をした。最後に、次期研究科長の川端 亮 教授が今後に向けての展望と閉会の挨拶をした。調印式と記者発表の運営には人科の院生・学生が設営スタッフとして参加した。



大阪大学大学院人間科学研究科・パナホーム株式会社 大阪大学オムニサイト（OOS）協定調印式

（写真左上：パナホーム代表取締役社長 松下 龍二氏と栗本 英世 人間科学研究科長）

（写真左下：2018 年 3 月 30 日 人間科学研究科インターナショナルカフェにて）

（写真右：2018 年 3 月 31 日 産経新聞に掲載）

11 障害・難病を抱える学生の就労支援ネットワークの形成

2017年度のヒューマンサイエンスプロジェクト経費により、障害や難病を抱える学生の就労支援ネットワーク作りを行った。障害や病気を抱える大学生の数は、年々増加し、現在全国で、大学生の1%弱を占めるにいたり、大学は就学支援体制を整えつつあるが、就労支援まで十分な手が回っていない状況である。このプロジェクトでは、支援に関係する大学関係者、行政担当者、支援企業、非営利団体、雇用企業担当者、当事者の学生など幅広く聞き取りを行い、また、そうした聞き取りを通じてネットワーク作りを進めた。幸い、関係者の意識は高く、連携にも熱心であり、継続的な連携ネットワークを形成できつつある。また、年度途中から始まったユネスコチェア「グローバル時代の健康と教育」への申請に関連して、このプロジェクトは今後はユネスコチェア事業の一部としても位置づける予定であり、すでに関係者から連携のためのパートナーレターをいただいている。

【プロジェクトメンバー】

《人間科学研究科内》

山中 浩司 教授（社会環境学講座 文化社会学研究分野）、山本 ベバリーアン 教授（未来共生学講座 共生教育研究分野論）、渥美 公秀 教授（未来共生学講座 共生行動論研究分野）、前馬 優策 講師（学生支援室）、樋口 麻里 助教（社会学系共通）

《大学院生・学生》

上野 彩（社会環境学講座 文化社会学研究分野 博士後期課程2年）、志水 洋人（社会環境学講座 文化社会学研究分野 博士後期課程3年）、正井 佐知（社会環境学講座 文化社会学研究分野 博士後期課程3年）、笠井 敬太（社会環境学講座 コミュニティー社会学研究分野 博士前期課程2年）、伊藤 駿（未来共生学講座 共生社会論研究分野 博士後期課程1年）、中川 卓哉（大阪市立大学経済学部4年）

《大阪大学学内》

望月 直人 准教授（キャンパスライフ健康支援センター）、吉田 裕子 特任研究員（キャンパスライフ健康支援センター）

【今年度実施した調査および会議の概要】

- 2017年 8月30日 大阪府商工労働部雇用推進室聞き取り（山中 浩司 教授）
- 2017年10月21日 大阪障がい者就労支援センター聞き取り（正井 佐知 院生）
- 2017年10月23日 大阪府商工労働部雇用推進室意見交換会（人科にて）
- 2017年10月27日 東京大学先端科学技術研究センター熊谷教授聞き取り（山中 浩司 教授）
- 2017年10月30日 関西大学キャリアセンター聞き取り（山中 浩司 教授）
- 2017年11月21日 神戸大学キャンパスライフ支援センター聞き取り（正井 佐知 院生）

- 2017年11月20日 広島大学アクセシビリティセンター山本准教授聞き取り（山中 浩司 教授）
- 2017年11月27日 社団法人企業アクセシビリティコンソーシアム意見交換会（人科にて）
- 2017年12月2-7日 仏国Université Toulouse聞き取り（樋口 麻里 助教）
- 2017年12月 4日 （株）エンカレッジ代表 窪 貴志 氏 意見交換会（人科にて）
- 2017年12月19日 甲南大学共通教育センター武田准教授聞き取り（山中 浩司 教授）
- 2018年 2月28日 京都大学学生総合支援センター村田准教授聞き取り（山中 浩司 教授）
- 2018年 3月9-16日 米国AUCD, DEI, AAPD 関係者聞き取り（山本 ベバリーアン 教授）
- 2018年 3月20日 障害・難病のある学生のための就労支援会議（中之島センター）
外部からの参加関係者：大阪府商工労働部 山本 恭一氏、RDneT 代表 香
取久之氏、（株）エンカレッジ代表 窪 貴志氏、東京大学准教授 熊谷 晋一
郎氏、（株）バリアフリーカンパニー代表 中澤 信氏、アクセシビリティ
企業コンソーシアム 西原 靖氏・濱田 泰史氏、京都大学 村田 淳教授、広
島大学 山本 幹雄 准教授、朝日新聞 寺尾 佳恵氏
- 2018年3月26-28日 韓国ナザレ大学訪問調査（伊藤 駿 院生）
ほかに学生当事者の聞き取りを6件行った。

12 学生の活動と単位化

2017 年度に本センターで活動した学生たちの活動内容に応じて、「人間科学学際実習Ⅰ・Ⅱ」「総合人間科学実習Ⅰ・Ⅱ」「総合人間科学特別実習Ⅰ・Ⅱ」の単位認定を行った。本年度は、3 名が単位申請し、単位を取得することができた。

1. 授業概要

本センターが企画・運営する講座や課外活動等の事業の参加を通して、研究成果の一般社会への還元方法や対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力等の実践的能力を身に付ける。

2. 授業目標

企画力、マネジメント力、発信力、対話力、主体的行動力等を養い、研究や実践活動に応用することができる。

3. 単位認定

(1) ランチトークスタッフ（企画力、マネジメント力、対話力、主体的行動力）

2 タームに相当する期間、ランチトークスタッフとして自ら進んで企画・運営に携わる。企画・運営の方法を説明し、主体的に行動することができる。

【認定単位 2】

(2) まなびのカフェ、コンポジウム等のスタッフ（企画力、マネジメント力、発信力、対話力、主体的行動力）

1 回のまなびのカフェ等のスタッフとして、自ら進んで企画・運営に携わり、会場等で報告や討論等を行う。

企画・運営の方法を説明し、主体的に行動することができる。必要に応じて自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

【認定単位 0.5】

(3) 小・中・高大連携の活動（企画力、発信力、対話力）

小・中・高校での出前授業等で、自ら企画に関わった1回の発表を行う。

自ら企画し、自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

【認定単位 0.4】

(4) 発表（発信力、対話力）

出前授業、まなびのカフェ等で比較的短時間の発表を1回行う（企画には直接関わらない）。自分の研究等を一般の人々に平易な言葉で説明できる。

【認定単位 0.3】

注1 単位は認定のみで、成績評価はしない。

注2 複数学期にわたって単位を合算することができる。

注3 終了時に報告書、(1)についてはレポートを提出する。

注4 大阪大学から謝金を支給された活動は、単位認定の対象とならない。

13 活動した学生たちの声

2017 年度に本センターで活動した 3 名の学生たちの声を紹介する。

それぞれが、未来共創センターの活動に関わるようになったきっかけ、活動を通して学んだことについて述べている。

◆ 島藤 安奈（人間科学研究科 行動生態学講座 比較発達心理学 博士前期課程 2 年）

私はもともと自分をアピールすることが苦手で、特にプレゼンテーション能力に欠けていると危機感を抱いていました。中道先生から未来共創センターの紹介があったその日、ここならきっと成長できる！と思い、すぐに連絡を取ったのを覚えています。

具体的な活動内容としては、1 つめは、聞き手のお客様に近い立場としてサイエンスカフェに携わりました。登壇者がどのような話をされるのか、どのような方が聞きにくるのかをあらかじめ打ち合わせし、二者間の意見交流ができるような空気作りに努めました。

2 つめは、話し手として幾つかの中高へ出張授業に行く機会をいただきました。例えばある中学校では、進路キャリアを考えるきっかけとなる話をしてほしいという要望がありました。そこで私は事前アンケートを取ることを提案し、当日はそのアンケートを基にリスナーと DJ というラジオ形式で話を進めることで、子どもたちに親近感を持ってもらおうと努力しました。また「私も勉強は好きではなかった」という自己開示を行うことで、阪大生も一緒なんだという共通意識を持ってもらうように工夫しました。

このように、話し手と聞き手という 2 つの立場を経験できたことで、聞き手側を意識したプレゼンテーションができるようになった気がします。このことは、プレゼンテーションだけでなく、研究計画を作成する時にも役に立ちました。

日本学術振興会特別研究員（DC 1）に採用されたのも、読み手の審査員を意識した書き方ができたからだと思います。

学生を紹介

小林聖心女子学院高等学校出身。

現在は、比較発達心理学研究分野に所属しています。自閉スペクトラム症児の視線行動特性について視線計測装置を用いて研究しており、自閉スペクトラム症児の障害特性や発達を評価できないかと日々奮闘中です。研究だけでなく任意団体を立ち上げ、誰しものが持つ“凸凹”の“凸”を活かせるようなインクルーシブ教育の場を作ることを目標としています。

◆ 大工 泰裕（人間科学研究科 人間行動学講座 社会心理学 博士後期課程 1 年）

「振り込め詐欺をテーマにしたサイエンスカフェを開催するのですが、一緒にどうでしょうか？」私と未来共創センターとの関わりは、修士論文で副査を務めてくださった先生からの、この 1 通のメールで始まりました。それまで詐欺を防止する研究をしながらも、実社会への貢献ができていないことにもどかしさを感じていた私にとって、これは願ってもないお話でした。すぐさま「よろしくお願いします」と返事をしたのを、今でも覚えています。

一般の方々を対象とした対話型の発表は、私にとって初めての経験で、準備段階から苦労の連

続でした。研究に興味を持ってもらうためにはどんな仕掛けを取り入れたらいいのか、誤解を与えずに専門的な話を理解してもらうためにはどんな伝え方がいいのか、一般の方々は何を知りたがっているのか、様々な議論をセンターの先生、共同発表の先生との間で交わしました。

最終的に、「参加者の方々に騙される経験をしてもらうことで詐欺の怖さを理解してもらう」というアイデアに行き着き、それを取り入れた発表を行いました。

発表を通して実感したのは、社会は研究に、詐欺被害の具体的な対策を求めているというシンプルな事実でした。質疑応答では、「詐欺被害を防止するためには結局何をすればいいのか？」という質問が多く見られ、曖昧な結論で終わらせてしまう学会発表とは求められるものが大きく違うという印象を受けました。

一方で、研究結果から確実な詐欺対策が導かれるわけではありません。研究結果とそれから得られるインプリケーションを、いかに誤解なく伝えるかということは、専門家に向けて研究結果を伝える学会発表とは違った難しさ、そして面白さがありました。

学生紹介

大阪府出身。大阪大学人間科学部卒業、大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。現在、同研究科博士後期課程在学中。専攻は社会心理学で、特に詐欺に騙される心理学的メカニズムについて研究をしています。現在は、博士論文のための研究の傍ら、詐欺被害の減少を目指した大規模共同研究にも実施者として参加しています。

◆ 礒見 愛香（人間科学部 社会学科目 人類学4年）

私は学生支援室の先生からご紹介を受けて、未来共創センターの活動に携わるようになりました。センターでは、出張授業とサイエンスカフェに携わっています。

人間科学研究科の先生方と行く出張授業では、フィリピンにルーツがある自分が生きていく中で感じたことについて話をしたり、自分の思いをこめてギター片手に歌ったりしています。私には、「自分のフィリピンというルーツをいかして誰かの役に立ちたい！」という夢がありました。出張授業では、自分の話をとおして、子どもたちを励ますことができたと思います。だから、私の夢も叶えることができました。また、私はアイデンティティと教育の関係について研究しているのですが、出張授業での経験や子どもたちからの感想が研究に役立っています。

サイエンスカフェの運営にも携わり、そこで地域の方の前で自分の学びについてお話しするという貴重な機会をいただきました。未来共創センターの取り組みの好きなところは、「人科（じんか）っぽい学び」（人科は人間科学部の略称）ができることです。例えば、サイエンスカフェでは、授業とは一味違う他の学系のおもしろさを知ることができたり、違う分野や地域の方と共に学ぶことで、教室では得られない新たな発見ができたりします。「分野の壁や人の壁を越えて学べる」という人科のよさが未来共創センターにつまっています。ぜひ参加して、今以上に「人科」を楽しみましょう！

学生紹介

大阪府立住吉高等学校出身。通信制の短期大学を経て、3年次より人間科学部人類学研究室に所属。フィリピンと日本にルーツのある自分の経験から、文化の境界、コンフリクトや多文化共生について興味をもち、人類学を学ぶようになりました。卒業論文ではミックスルーツのアイデンティティについて研究しています。食にも興味があり、卒業後は食品メーカーに就職します。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター